

Maximaの 規則を利用する話

東芝インフォメーションシステムズ株式会社

横田博史

規則って何？

- Maximaのある条件を満たす式に対する変換規則
 - $\tan(x) \rightarrow \sin(x)/\cos(x)$ 等々
- rulesを入力するとMaxima上で定義された規則の一覧が表示され, `disprule(<規則名>)`で内容が表示される

```
(%i1) rules;
```

```
(%o1) [trigrule0, trigrule1, trigrule2, trigrule3, trigrule4,  
htrigrule1,
```

```
htrigrule2, htrigrule3,
```

```
htrigrule4]
```

```
(%i2) disprule(trigrule0);
```

```
(%o2)          trigrule0 : tan(a) ->  $\frac{\sin(a)}{\cos(a)}$ 
```

```
(%i3)
```

規則について

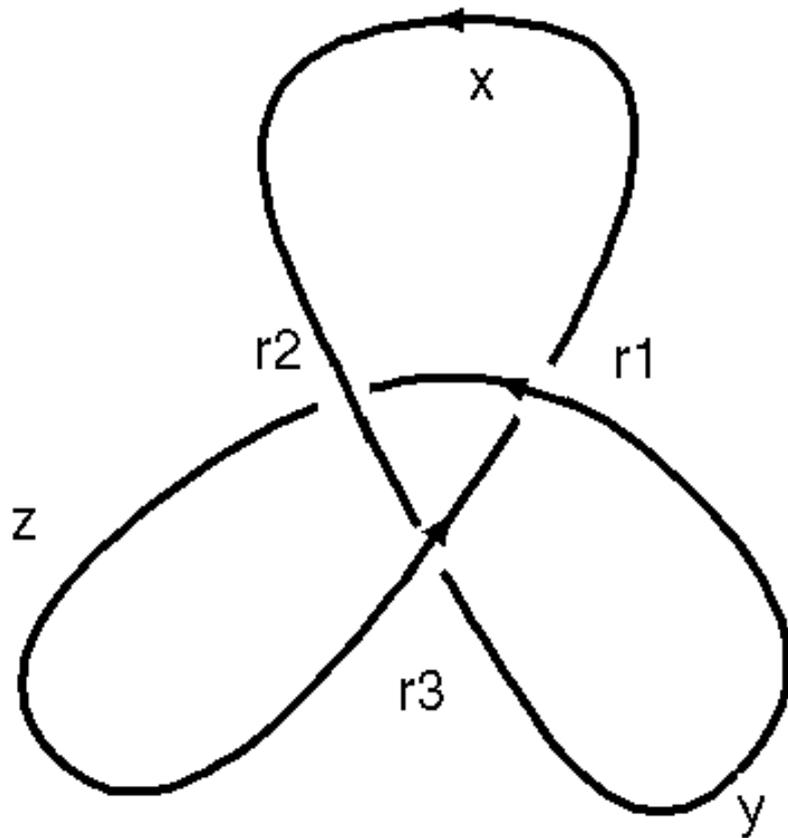
- Maximaは式の並びに対して, 規則を基にした処理が行える
- Maximaの規則は利用者が自由に定義出来る
 - defrule関数やlet関数を利用して規則を定義
- 規則は入力した式に直ちに適用されない
 - apply1やletsimp等の関数で式を評価してはじめて適用される

defruleを使った規則の定義

- defruleによる規則の定義では, 式の並びを指定する際に予め宣言した変数を用いなければ, 規則の定義で利用した式の並びに対してのみ規則が適用される
- 一般的な式の並びの指定ではmatchdeclare関数で宣言した変数を用いる

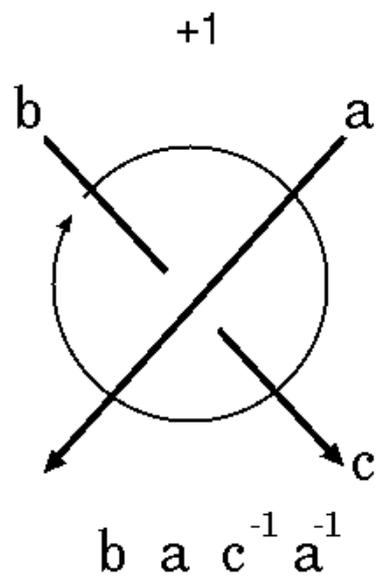
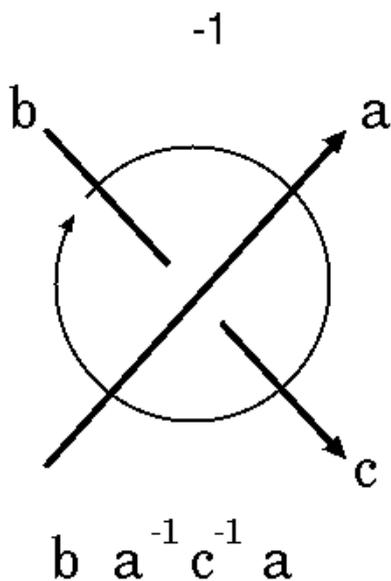
```
(%i3) infix("neko")$
(%i4) defrule(NEKOProd,a neko (c*b),a neko c + a neko b);
(%o4)      NEKOProd : a neko (b c) -> a neko c + a neko b
(%i5) apply1( a neko(b*c));
(%o5)      a neko (b c)
(%i6) apply1( a neko(b*c),NEKOProd);
(%o6)      a neko c + a neko b
(%i7) apply1( x neko(y*z),NEKOProd);
(%o7)      x neko (y z)
```

例:結び目のアレキサンダー多項式



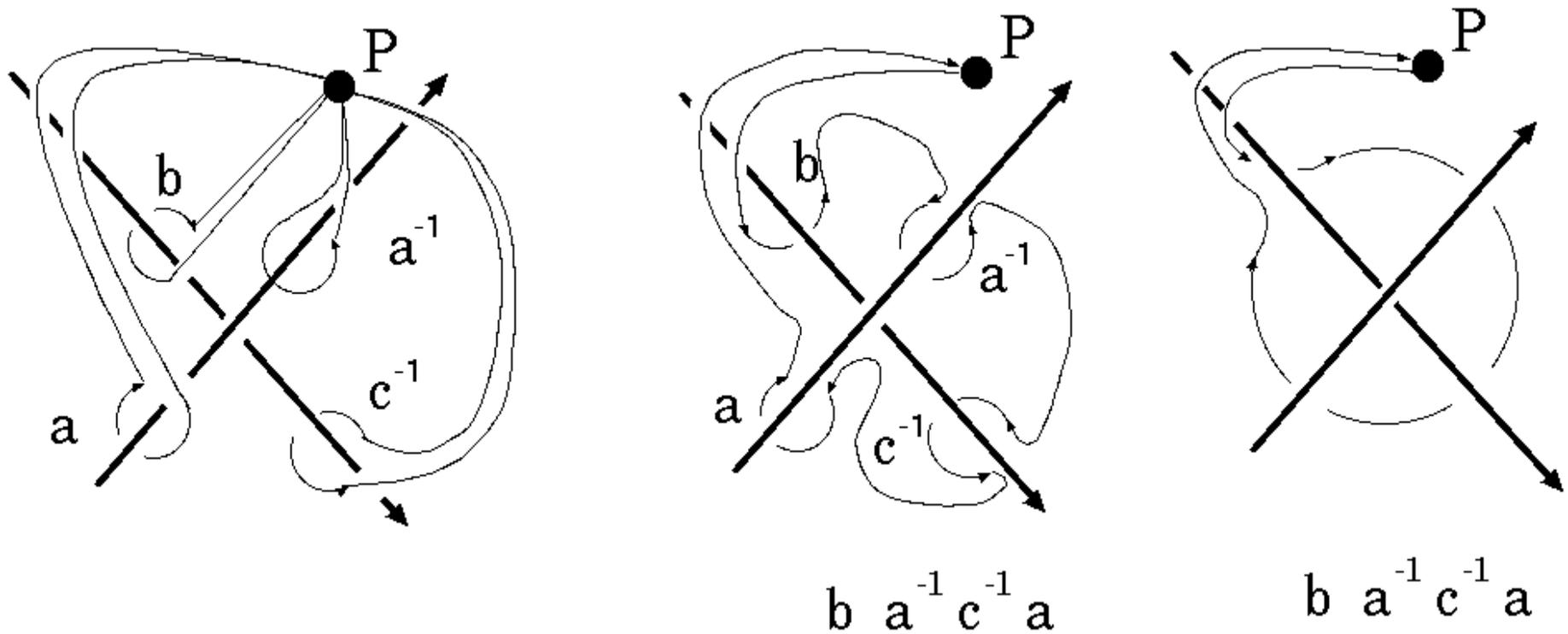
- 結び目群(結び目の補空間の基本群)の不変量
- $Z[t^{(-1)}, t]$ のイデアルの生成元
- フォックスの微分子によるヤコビアンから計算可能

結び目群のヴィルティンガー表示



- 結び目の射影図から求められる
- 生成元は上道
- 関係子は交差点で決定される(左図参照)

ヴィルティンガー表示の意味



フォックスの微分子

— Fox の微分子 Δ —

- $\Delta(x + y) = \Delta(x) + \Delta(y)$
- $\Delta(xy) = t(y)\Delta(x) + x\Delta(y)$

— Fox の微分子 Δ の性質 —

- $\Delta(n) = 0, n \in \mathbb{Z}$
- $\Delta(x^n) = \sum_{i=0}^{n-1} x^i \Delta(x), n \in \mathbb{N}$
- $\Delta(x^{-n}) = -\sum_{i=-n}^{-1} x^i \Delta(x), n \in \mathbb{N}$

- $\Delta \rightarrow d/dx_1, \dots, d/dx_n (x_1, \dots, x_n: \text{生成元})$
- $dx_j/dx_i = \delta_{ij}$

計算手順

- 生成元 x_1, \dots, x_n , 関係子 r_1, \dots, r_n
- d/dx_i を $[r_1, \dots, r_n]$ に作用させてヤコビアンを計算
- 非可換積を可換積に置換する
- 生成元を変数 t で置き換える
- ヤコビアンの余因子行列を計算
- 各成分の最大公約因子がアレクサンダー行列

Maximaでの表現

- 語はMaximaの非可換積(dot積.)とその冪を利用
 - $x.y.z^{2}.w^{-1}$
- フォックスの微分子は語に対して定義
- prefix函数を用いて前置式演算子として宣言
- declare函数を用いて線形性を宣言

```
(%i1) prefix("D_fox:");
```

```
(%o1) D_fox:
```

```
(%i2) declare("D_fox:",linear);
```

```
(%o2) done
```

演算子と被演算子の束縛力

- Maximaでは演算子の被演算子に対する束縛力を指定可能
- 指定しない場合, 束縛力はデフォルトで180
 - +の場合: 左右の束縛力は100
 - *の場合: 左束縛力は120のみ

```
(%i60) infix("mike",130,130)$
```

```
(%i61) 1+3 mike 4+5;
```

```
(%o61)          3 mike 4 + 6
```

```
(%i62) infix("mike",90,130)$
```

```
(%i63) 1+3 mike 4+5;
```

```
(%o63)          4 mike 4 + 5
```

並びの設定

- matchdeclare関数を用いて並びの照合を定義
- 同時に並びの照合の述語関数を指定する
- 特に述語関数の必要がなければtrueを指定

述語関数wordp

```
wordp(w):=if atom(w) then true  
else if member(inpart(w,0),[".", "^^", "*", ""]) then true  
else false;
```

```
(%i3) matchdeclare([_x,_y],wordp)$
```

defruleによる規則の設定

- `defrule(<規則名>, <式の並び>, <変換後の式>)`
- `defrule`による規則は`apply1`, `apply2`, `applyb1` 関数で与式に適用

```
(%i12) defrule(Dfox_Prod,D_fox:(_x._y),D_fox:_x*t1(_y)+_x.D_fox:_y);
(%o12) Dfox_Prod : D_fox: (_x . _y) -> D_fox: _x t1(_y) + _x . D_fox: _y
(%i13) apply1(D_fox:(x.y),Dfox_Prod);
(%o13)          D_fox: x t1(y) + x . D_fox: y
```

非可換積演算子の結合律

- 非可換積演算子としてMaximaのdot演算子を利用
- dot演算子は結合律をデフォルトで満たす
- $x.(y.z)$ は結合律を満たす場合に $x.y.z$ となる。内部表現では $(. x y z)$ となりフォックスの微分子で処理が出来ない

```
(%i14) D_fox:((x.y).z);
(%o14)          D_fox: (x . y . z)
(%i15) dotassoc:false;
(%o15)          false
(%i16) D_fox:((x.y).z);
(%o16)          D_fox: ((x . y) . z)
```

dotassocをfalseに設定して, 結合律を除外

fox.mc

AlexanderPoly.mc

maxima-init.mac

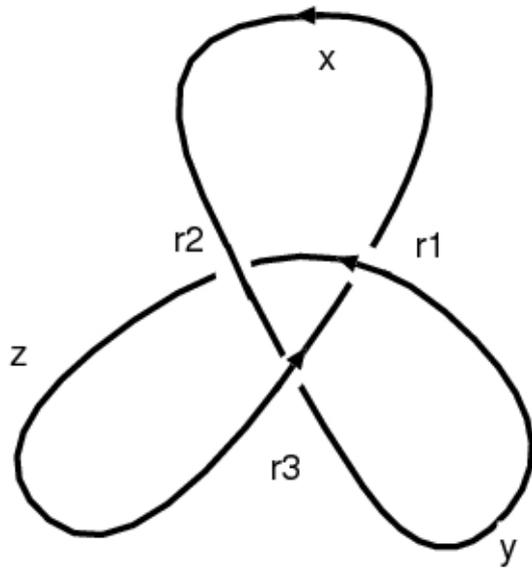
- Maximaの初期化ファイル
- 関数の読込や大域変数の設定等が行える
- Maximaを起動するディレクトリ上に置く

`/* maxima-init.macの内容例 */`

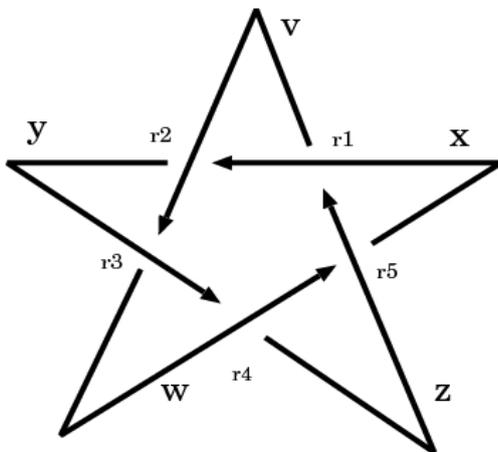
```
load("fox.mc")$
```

```
load("AlexanderPoly.mc")$
```

計算例



- $t^2 - t + 1$
- $t^4 - t^3 + t^2 - t + 1$



Maximaマニュアルの事

- 個人の頁<http://www.bekkoame.ne.jp/~ponpoko>で修正版を公開予定(連休前?)